Title	青年期の樹木画に関する研究(6)
Author(s)	山田，麻有美
Citation	聖学院大学論叢，14(2)：221-232
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=213
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

青年期の樹木画に関する研究(6)

山　田　麻有美

A Study of the Baumtest Used with Adolescents (Part 6)

Mayumi YAMADA

This study deals with recent studies of the Baumtest reported in 1998 and 1999. Four studies were taken up. Conclusions were as follows: (1) TheBaumtest is an effective non-verbal method for understanding adolescents' inner world. (b) Further research is needed to interpret the inner world of adolescents revealed by the Baumtest.

1．日本におけるバウムテスト

日本において，樹木画を心理検査として用いる検討を最初に行なったのは，深田尚彦（1957[1]）であるとされる。深田の研究は，HTPテスト（House-Tree-Person Test）の樹木画に注目したもので，幼児・児童の樹木画を発達的に捉えようとした（1959[2]）。その後，篠原大典ら（1962a[3],1962b[4]），および，津田舜甫ら（1962[5]），国吉政一ら（1962a[6],1962b[7]）によって，発達的ないし臨床的な研究がなされ，本格的に日本の心理臨床の場に導入されるようになった。

さらに，1970年には，Koch,C.の "The Tree Test（1952[8]）" が，『バウム・テスト—樹木画による人格診断法』と題して，林勝造らによって翻訳され，出版された。これ以降，Baumtestは，日本の心理臨床の場で，心理的な問題の診断のテスト・バッテリーとして用いられたり，心理療法を進めていく際の過程を捉えるために用いられるなど，臨床心理検査の１つとしての役割を果たしてきた。

Baumtestは，投映法心理検査としては実施法が簡便であるだけでなく，被検者にも容易に受け入れられる検査法である。実施の際，被検者は，Ａ４版の白紙と４Ｂの鉛筆と消しゴムだけを渡され，『実のなる木を一本描いてください』という簡単な教示が与えられるだけであるから，被検者が言語による応答をする必要はない。被検者の有している知識や技能を問われるものでもないので，検査に対する緊張や抵抗が少ない心理検査である，といえる。

Key words; Baumtest, Validity, Adolescents, Non-verbal Method

1－1．これまでの日本における被検者別研究

1－1－1．幼児・児童を被検者とした研究

幼児・児童は，自らが困難に感じている事柄を言葉で表現することが少ないだけでなく，それらを表現するための適切な語彙が少ない。自分の問題が何かを明確にするための言葉が少ないのである。これは，幼児・児童が何らかの問題を持っていたとしても，それらの問題がどのようなものであるかを整理したり，分類したりすることがしにくい，ということを意味する。それゆえ，幼児・児童の多種多様な心理的問題の理解するためには，言語を媒介とせずに，幼児・児童が自らの問題を表現できる方法が必要なのである。Baumtestは，このような幼児・児童の心理的問題を理解するのに，最適な方法といえるだろう。

このようなことから，Baumtestはこれまで，幼児・児童の心理的問題を理解するために用いられてきただけでなく，問題解決の過程の跡付けたり明確化したり，心理療法の効果の測定したりするために，有効な方法として用いられてきた。

また，知的障害や難聴・言語障害などの身体的な障害をもつ幼児・児童の心理的問題とBaumtestとの関連についても，多くの研究がなされている。これらに関しては，津田浩一『日本のバウムテスト』（1992[9]）に詳しく述べられているが，このような障害をもつ幼児・児童にも，Baumtestは，言語を媒介としていないため，実施することができ，有効であることが示されている。

1－1－2．非行少年を被検者とした研究

Baumtestは，少年非行の相談ないし矯正教育の場においても，少年非行における心理的問題を明らかにし，適切な処遇を行なうために用いられてきた。非行少年のBaumtestについては，多数の臨床的研究が継続的になされてきているが，非行少年群とと非行少年ではない群との間には，明確な相違がないという研究結果も見られている。

1－1－3．高齢者を被検者とした研究

さらに近年の高齢化社会の進行により表面化してきた，加齢に伴う心理的な問題を捉えるための一助とするための研究も進んできている（一谷彊他1986[10]，一谷彊他1987[11]，一谷彊1988[12]，一谷彊1989[13]，一谷彊1991[14]，小林敏子1990[15]など）。

1－2．Baumtestの基礎的研究

また，Baumtest解釈の信頼性と妥当性について，発達的研究（国吉政一1962[16]，一谷彊1975[17]，武田由美子1973[18]，中尾舜一他1978[19]，1979[20]，高見良子他1978[21]，仙田善孝1980[22]，中田義朗1980[23]，

山下真理子1981[24]，中島ナオミ1983[25]，1984[26]a，1984b[27]，津田浩一他1986[28]）や，形態を指標とした研究（中島ナオミ他1982[29]，山下真理子1982a[30]），S-D法による因子分析的研究（一谷彊他1974[31]，1975b[32]，1976[33]，1977a[34]，b[35]，1978[36]），比較文化的研究，再検査法などによる信頼性の研究（青木健次1977[37]，1978[38]，1980a[39]，b[40]，c[41]，1981[42]，一谷彊他1985[43]）など，多くの検討が加えられてきた。これらの研究によって，解釈が恣意的にならないために，長期間の訓練が必要とされていたBaumtestが，比較的簡便に解釈することができるようになった。

A 4 版の白紙と，4Bの鉛筆さえあれば，いつでも，どこでも，誰にでも実施することができるBaumtestは，こうして，幼児から老年まで，幅広い年代の心理的問題を理解し，解決するために，心理臨床の場で広く使用されている。このことは次のことを示しているといえるだろう。すなわち，Baumtestは，何らかの問題を持ちながら，その問題に言語を与え，言語によって分類し整理することが不得意である人々が，言語によらずその問題を表現できる方法として期待されている，と。

幼児・児童に限らず，自己の内面を言語によって十分に表現できない人々にとって，自分の抱えている問題を自分自身が理解することも難しい。何らかの問題があることは感じていたとしても，それが何に由来するものなのかを説明することが難しいのである。そのような時，言語を用いることなく，その問題を表現できるのがBaumtestなのである。

2．問 題 と 目 的

2－1．青年期のBaumtestの意義

上述の通り，Baumtestに関する研究は，40年ほどの間に，さまざまな視点からなされてきた。しかるに，青年や成人に対して，心理臨床の場でBaumtestが用いられることは比較的少ないようで，青年や成人を対象とした研究も，多くはない。特に，日常生活を対した支障なく送っている青年を対象としたBaumtestの研究は少ない。

これは，青年には，心理的問題を持つ者が少なかったからというのではなく，心理的問題を抱えている青年であっても，Baumtest以外の，言語を媒介とする多種多様な心理検査に，十分応じられる，と考えられてきたためであろう。これまでの発達研究の成果により，青年は，抽象思考が可能であり，客観的に事物を捉えることもでき，それらに必要な言語を獲得している，と考えられている。自己の内面を言語によって整理し，表現する必要が生じた場合に，一般的な青年は，それらの言語によって，自らの内面を客観的に捉え，心理的問題を言語によって表現することができる，と考えられてきた。

また青年期は，自己の内面に関心が向き，豊かな精神生活に入る時期である。自己と外界とを区別し，自分が「自分」であることを，何らかの方法で自ら確認しようとする時期が，青年期である。この，自分が自分であり，他人とは異なることを確認していく過程で，言葉は重要な役割を果す。

知覚したさまざまな感覚や湧き起こる感情に言葉を与え，類似した感覚や感情をまとめて1つの名称を与えると，自分の内面を整理することができ，『自分』をより客観的に理解することができるようになる。さらに，内面に生じる欲求や葛藤に言葉を与えることによって，欲求の性質や程度を特定したり，葛藤のもとになっている欲求や状態に気付き，その葛藤を解消することもできるようになる。青年が自分の内面に生じる感覚や感情，葛藤などに言葉を与えるようになるこの過程が，他人とは異なる『自分』を発見し，自分が『自分』になる過程であり，青年期の精神生活そのものである，ということもできるだろう。このように，青年が自分の内面や外界とかかわることにより生じるさまざまな感覚や感情，葛藤などに翻弄されることなく，安定的な自己を形成するために，言語による表現は不可欠なのである。

しかるに，昨今の青年の言語生活はきわめて貧弱であると，筆者には感じられる。

多くの青年たちは，他者の視線を感じた時や，急な予定変更を余儀なくされた時，甘えが許されない時など，欲求不満や葛藤状態に立ち至った時に生じる感覚ないし感情を，『ムカツク』という言葉で言い表す。例えば，電車の中で知らない大人から見られた（実際には，青年がとっている行動が人目を引くようなものである場合が多いのだが）と感じると『ムカツク』し，青年自身とは直接的関係のない用事を依頼されるれると『ムカツク』し，提出期限が過ぎてしまったレポートを出しに来て断られても『ムカツク』，という。『恥かしい』とか，『面倒くさい』とか，『がっかり』といった，それぞれの状況とそこで生じた感情を適切に表すであろう言葉があっても，『ムカツク』という1つの言葉で『間に合わせている』ようなのだ。

また，この『ムカツク』という表現は，青年自身が欲求不満の原因となっている場合であっても，その時に生じる感覚ないし感情を表現する言葉として使用される。例えば，失敗をしたとか遅刻を指摘されたなど，ある水準に達することができなかった『残念』な思いや劣等意識，恥かしさ，後悔など，その場で生じる感覚ないし感情を的確に表現できる言葉を用いることをせず，『ムカツク』という表現で括ってしまう。

その他，青年の言葉には，『キレル』『チョー』『マジ』『ブルー』『オイシイ』などの短いカタカナで標記される言葉もあるが，決して豊富ではない。青年は，これらの数少ない短い単語の組み合わせで，さまざまな場面で内面に生じる感覚や感情，葛藤をすべて表現し尽くそうとしているように見える。

しかし，実際には，少ない語彙で表現される感覚や感情，葛藤は，正確に他者に伝達されえない。他者に伝えたいことを伝えるための語彙が少ない青年は，より一層の欲求不満や葛藤を経験することになる。そこで，対人関係に悩む青年は多い。

自分の感覚や感情，葛藤を表現するための語彙の少なさは，対人関係における問題を引き起こすだけではない。他人とは異なる『自分』を発見し，自分が『自分』になる過程である青年期の精神生活そのものに，支障が出る。自分本来の姿を客観的に捉えることができず，自分の生き方がわか

らず，混乱してしまう。本来の自分がわからないために，高校・大学に進学しても，勉強する意味を見出すことができず中途退学してしまったり，大学を卒業しても就職しなかったりするようになる。その中途退学したり定職を持たなかったりする多くの青年は，決して，そのことを良しとしているわけではない。ただ，どうしたら良いのか分らないだけなのである。将来のこと，自分の生き方に悩んでいるのである。

このような現代青年の状況を考慮する時，現今の青年を理解するため，あるいはその心理的問題の解決を援助するためには，言語のみ媒介にするのでは，不十分であろう。

Baumtestは，上にも述べたように，その実施がきわめて簡便で，被検者が言語による応答をする必要がなく，心理検査に対する抵抗も少ない。幼児や，児童，高齢者など，言語による表現が不十分である人々にとって有効であるだけなく，現代の青年にも適する心理検査，といえるだろう。

2－2．青年の樹木画の研究

日本でのBaumtestの研究は，50年近い歴史を持ち，臨床心理検査としての精度は高まってきているといえるだろう。また，その適用される年齢の範囲も，幼児から高齢者までと幅広く，発達的な検討もなされてきている。しかし，日常生活を概ね支障なく送っている青年の樹木画に関する研究は多くない。

Baumtestは，当初，職業相談の手がかりとして用いられていたという。心理的な問題を抱え，日常生活に困難を感じている人を対象としていたのではない。日常生活に支障はない人がより良い生き方を模索する時に，指針を提供するものとして用いられてきたのである。

現代の青年もまた，より良い生き方を模索している。Baumtestが，日本においても，青年を理解し模索の指針を提供できるようにするためには，概ね支障なく日常生活を送っている青年を対象とした研究が必要である。このような立場から，筆者は研究を進めてきた。本研究もまた，この立場を継承し，通常の日常生活を送っている青年を対象としたBaumtestの精度を高めて行くことを目的としている。

3．青年期の樹木画の特徴

3－1．青年期の樹木画のサイズ

筆者は，『青年期の樹木画についての一考察－Koch,C.のバウムテストを基にして』（1998[44]）において，4年生大学に在籍するが青年と短期大学に在籍する青年のそれぞれの樹木画に着目し，検討を行なった。

描かれた樹木の，縦（上下方向への広がり），横（左右方向への広がり），樹幹の横（左右方向への広がり），樹幹の縦（上下方向への広がり），幹のサイズ（根から幹までの高さ），根のサイズ（根

の幅）をそれぞれ測定し，分類を行った。この手順により抽出された6枚の樹木画の検討を行ない，明らかになった点は次の通りである。

①平均的サイズの樹木画は，紙面の中央に位置し，中央全体を占めるほどの大きさを持ち，大きい樹冠部と幹や幹とがバランスの良く描かれてはいるが，筆圧は弱く，存在感が稀薄で，弱々しい印象を与える。

②平均的サイズより大きい樹木画は，紙面いっぱいに，強い筆圧で描かれてはいるが，全体的にはバランスが悪く，不安定な印象を与える。

③平均的サイズより小さい樹木画は，中程度の筆圧で，紙面中央に描かれていて，樹木全体のバランスは悪くないが，限定された生活領域の中で安定的である，という印象を与える。

以上のことから，平均的樹木画を描く青年は，その日常生活を安定的に送っているが，決して積極的かつ溌剌と生活しているのではない，と考えられる。また，平均より大きなサイズの樹木画を描く青年は，日常生活を積極的に生きようとしているものの，その積極性のゆえか，安定的ではないようである。さらに，平均より小さいサイズの樹木画を描く青年は，限られた生活の場において安定的な日常生活を送っていることと推測される。

青年が自分の日常生活を言語によって表現する時，表現される内容は，その青年が言語を与える事のできた日常の部分に限定される。それに対して，樹木画によって表現される内容は，青年の内部に生じている樹木のイメージに賦活された，まだ言語を与えられていない『自分』である，といえる。樹木の形態・紙面の位置・運筆などから得られる樹木画全体から得られる解釈者の印象は，樹木画に表現されている青年の言語化以前の『自分』から得られるものということになる。樹木画の解釈は，樹木画に表現されている青年の言語化以前の『自分』に，言葉を与える作業である，ということができるだろう。

本研究では，樹木画に表現されている青年の言語化以前の『自分』を，解釈者の言語によって言語化したのである。これは，自己の内面を表現する適切な言葉を多くは持たず，また，自己の内面を言語によって整理し理解する習慣を持たない現代青年を理解する方法として，Baumtestが有効であることを示すもの，と言えよう。

3－2.『建て前』得点の低い青年の樹木画

筆者は，『学生理解の手がかりとしての樹木画の研究』（1998[45]）において，MMPI-MINI自動診断システム（以下MMPI-MINIと呼ぶ）の『建て前』得点が低かった青年の樹木画を検討した。MMPI-MINIでは，被検者の質問紙に対する応答のし方の特徴を捉えようとして，いくつかの尺度を設定している。その一つが『建て前』尺度である。この尺度では，被検者が，本音と建て前を区別しているかどうかが測られるとされている。「斯くありたい」ないし「斯くあるべき」という一般常識的な考えをもとにした応答，すなわち『建て前』的応答がどの程度なのかを示すものである。

この得点が低い，ということは，『建て前』的応答が少ないことを表す。質問文に対する被検者の応答が，過度に常識的にはなっていない，ということを意味する。応答がステレオタイプでないということは，被検者のものの見方・考え方は，固定された画一的なものでない，ということになる。ここでは，この『建て前』得点の低い被検者の樹木画の検討を行なった。

この観点で抽出された9枚の樹木画の特徴は，次の通りである。

①形態的特徴は，紙面ほぼ中央左寄りに描かれた中程度の大きさの樹木画で，樹冠部は空白ないし透視的にりんご様ないし円形の実が描かれており，葉や枝，根の描写なほとんど見られない。

②筆圧が弱い線で描かれたものや，描きなおし，線を重ねたりしたものが多かった。描画線の勢いは，あまり感じられない。

③それぞれの樹木画に対する印象は，「孤立した・違和感のある」，「融通が利かない」，「空虚」，「ありふれた」，「飼い慣らされた」，「ありふれた」，「空虚で寂しい」，「何かにこだわっている」といったもので，特に強い印象のものはない。9枚とも，描画者の心的エネルギーが不足していて，非活動的で，あまり目立たない印象である。

以上をもとにした解釈では，次の点がこの9枚の樹木画に共通すると考えられる。まず第1は，被検者が常識的で，現実に適合した行動が撮れるであろう，という点である。9枚すべての樹木画の大きさは中程度，すなわち日常生活の枠の中に納まっていて，社会的枠組みからの著しい逸脱を示唆する表現は見られない。描画者の日常も，常識に従った，問題のないものであろうと，推測される。

第2は，描画者の内的生活の貧困と現実眠実の欠如である。

樹木画の紙面内すなわち日常生活の枠内に表現されたものは，ステレオタイプな実をもつ，通り一遍の空疎な樹木である。また，描画線の勢いは感じられず，筆圧も弱い。描き直しや線を重ねた表現が多く見られる。これらのことから，この9枚の樹木画の描画者は，内面に注意を向けることが少なく，日常生活における常識的な行動は取れるものの，自分の行動には自信が持てないでいるだろう，と考えられる。

この内的生活の貧困さや現実吟味の欠如した状態と，常識的で現実に適合した行動が取れることとは，一見矛盾するように見える。しかし，学校生活に適合した行動をとることにのみ注意を向けつづけ，内面に注意を向けてそれらに言葉を与える機会を持てなかったであろう現代の青年にとっては，この矛盾するように見える状態が，通常のあり方なのだと理解できるだろう。

ここで問題点は，質問紙法検査によって，『建て前』的応答が少ないとされた青年が，Baumtestによって，現実吟味が欠如し内的生活が貧困であるとされた点にある。言語により内面を表現すること習慣を持たない青年の質問紙に対する応答が，青年の内的状態を反映していない，という問題である。現代青年の言語を媒介とした表現や態度は，そのままその個人の内的生活を反映するとはいい難い，ということを示すものであろう。

3－3．MMPI-MINIで「適応上の問題」なしとされた青年の樹木画

筆者は，『青年期の樹木画についての研究』（1999[46]）の中で，MMPI-MINIの解釈において『被検者の真の状態は正確に記述されており，現在の精神状態が反映されている』とされる『受検態度』で，且つ，『目立ったストレス症状は現れておらず』，『適応上の重大な問題は見られず，基本的には正常である』という『診断印象』を得た青年の樹木画に着目し，2枚の樹木画を抽出し，検討を行なった。その結果，次に述べる点が明らかになった。

①この2枚は，太い幹と樹冠部と実からなる大きい樹木画である。紙面全体に空白の部分が多くみられる。地面線も描かれているが，幹の太さ・長さおよび根の張り方などのバランスが悪く，安定性が欠けている。

②筆圧は，2枚で異なる（一方は強く，他方は普通程度）が，描画線は類似している。すなわち，双方とも，何本もの線を重ねる描き方をしていて，不連続・不規則な線が多く見られ，閉じられていない線も見られる。

③樹木画の位置は，双方とも，樹木のアウトラインは，紙面の中央部分から上部全体を占めているが，樹木の内部は空白の部分が多い。

④どちらの樹木画も，接木されたような不自然さや違和感，空疎さ，不調和などの納まりの悪い印象をである。

以上から，MMPI-MINIで『適応上の問題なし』とされた被検者の樹木画を解釈で共通する点は，次の通りである。

第1は，描画者には意識化されていない問題があり，内的不整合状態ないし葛藤状態があると考えられる点である。樹木の形態は双方とも大きい方であるが，不安定で納まりが悪い。運筆にも一貫する傾向が認められず，反って，不調和で不自然な，違和感を与えている。これらは，描画者の意識化されていない心理的問題や葛藤状態の存在を示している，と考えられる。

第2に，描かれた樹木の内部に空白の部分が多く見られ，描画者の自己イメージが曖昧であるかまたは，自己が確立されていない状態であることが窺がえる。

第3に，不規則で不連続な描画線と，線を何回も重ねて描く描き方は，自信のなさや消極的な態度を示し，心的エネルギーが不足していると推測される。

この描画者は，内的生活では問題を抱えているとはいえ，日常生活には適応しているように見える。現実には，自己イメージを曖昧にしておくことで，内的問題を回避し，葛藤状態の表面化を避け，こころのバランスをとっているので，日常生活に支障はないであろう。行動に一貫性がなく，矛盾した行動が見られるかもしれない。

このように，Baumtestに表現された描画者の『適応』状態は，MMPI-MINIの診断結果の『適応上の問題なし』とは，異なっている。MMPI-MINIの『適応上の問題なし』とは，被検者の言語による応答に関するものであって，その内面を問題にしていない。しかるにBaumtestでは，その表面上の

適応の良さと同時に，描画者が自分でも気付いていない内的問題までもが，表現されているのである。

3－4．特定の形態（「ふたば」）の樹木画

筆者は，『青年木の樹木画の研究（2）』（2000[47]）において，特定の形態（「ふたば」）に着目し，4枚の樹木画について，その解釈過程を明らかにし，検討を行なった。ここで，特定の形態として「ふたば」に着目したのは，Baumtestの解釈の対象となる樹木画の形態が限定され，解釈過程を明らかにしやすいと考えたためである。その解釈から明らかになった点は次の通りである。

①形態の共通点

樹木画のサイズは，細くて小さいかまたは，非常に小さい。4枚の樹木画すべてには，幹（茎）と「ふたば」とが描かれている。1枚を除き，すべての「ふたば」の根本には，地面の線が描かれている。また，この小さい「ふたば」を支えるかのように，地面の線が描かれている。

②筆圧は，強弱が混在し，一定していないものが多い。サイズが小さいので，描画線の長さは短めである。

③樹木画（「ふたば」）は，紙面上のほぼ中央・下・やや左よりの位置に描かれている。

④これらの樹木画は，全体的に，頼りなく不安定な印象で，ためらいがち・遠慮がちな感じである。「ふたば」が内的に持っている，これから伸びて行く勢いを感じさせるような運筆のものもある。

これら4枚の「ふたば」のうち3枚（TS，SI，AN）は，地面から生えていることが明らかに分るように描かれているが，1枚（MT）は，地面の線は描かれておらず，空中を浮遊しているように描かれている。また，同じ3枚（TS，SI，AN）の双葉は，上向きに描かれているのに対して，1枚（MT）の双葉は，下向きに描かれている。このような違いに着目し，検討したところ，次のようなことが明らかになった。

まず，3枚（TS，SI，AN）の「ふたば」は，描画者の将来への志向性と現在の状態を表していると考えることができるだろう。「ふたば」は，地面を支えとし，その葉を上に向けて伸びて行こうとしているようである。これは，描画者が方向性を持って将来へ進んでいこうとする勢いを表していると考えられる。また，現在は，情緒的安定性や自尊心，内面の豊かさなどを表すと同時に，内的な統合はできておらず，支えを必要とし，時には対人的に孤立したり，心理的に不安定になったりすることもあると推測される。

これに対し，MTは，孤立傾向や，自信のなさ，自己イメージの曖昧さなどが表されていると考えられる。現在は，根を張るべき場所も定かでなく，浮遊状態でさまよっている状態にある，と推測される。将来への志向性は表現されていない。

このように，同じ形態の特徴（「ふたば」）を持つ樹木画でも，細部を検討することにより，表現されている内容の差異を明らかにし，樹木画に表現されている内容をより詳しく理解することができる。それゆえ，Baumtestは，樹木画として表現されている内容を詳細に検討することによって，言語によって表現されない内的状態を理解するための有効な方法である，といえるだろう。

4．青年理解の方法としてのBaumtest（援助と展望）

これまでの研究から，Baumtestによって明らかにされる描画者の側面は，①対人的側面，②日常的態度，③適応状態，④自身に関する認識，⑤描画者の顕著な心理的特徴などであることがわかってきた。これら5つの側面は，心理的な問題点を明らかにする手がかりを提供するものであると同時に，心理的な問題が表面化してはいない個人を理解するためにも有力な手がかりとなるだろう。

Baumtestは，言語を媒介としない。Baumtestに用いられる言葉は，教示のみである。『実のなる木を1本描いてください』，という短い教示の言葉は，その場で被検者が求められている行動が，どのようなものであるかのみを伝える言葉である。そして，この簡単な短い教示から描かれる樹木は，被検者の内面を表現している。その表現の内容は，言語による表現に優るとも劣らない。

筆者のこれまでの研究から，Baumtestが，心理治療を目的とする心理臨床に用いることができるだけでなく，広く一般的に，個人を理解するための方法としても利用できることが示されてきた。

質問紙法で，質問紙作成者の視点から，質問紙作成者が明らかにしようとしている内容のみを知ることができる。主体は質問紙作成者であって，回答者ではない。Baumtestでは，主体は描画者である。描画者は，検査者の意図に左右されることなく，内面を表現することができる。それゆえ，Baumtestは，一人一人の青年をより深く理解し，関わりを持っていく上で，多くの手がかりを提供することができるのである。

これまで用いられてきた言葉とは無関係に生きているように見える現代の青年。大人たちが使ってきた言語により自分を表現することがしにくい現代の青年。この現代の青年の内的情況を理解し援助するために，言語とは無関係に人の身近に存在している樹木が意味を持つ。Kochが言うように，「樹木の持つ生命力」や「成長力」，「中から外に押し出そうとする作用」が，言語を媒介とせずに青年の内面を「賦活」させ，樹木画として表現されるのである。このようにして表現された樹木画をより正確に理解することが，現代の青年を理解し，援助するために必要なのであろう。

参考文献

(1) 深田尚彦：幼児の樹木画の発達的研究　心理学研究　28：286－288　1957
(2) 深田尚彦：学童の樹木画の発達的研究　心理学研究　30：107－111　1959

(3) 篠原大典他：Baumzeichenversuchの研究（1） 発達段階におけるBaumzeihnungの変遷 精神神経学雑誌，64, 808, 1962a
(4) 篠原大典他：Baumzeihnungの研究（2） 症例研究 64, 808, 1962b
(5) 津田舜甫他:Baumzeichenversuchの研究（4）聾唖児のBaumzeihnung 精神神経学雑誌 64, 818, 1962
(6) 国吉政一他：バウムテスト（Koch）の研究（1） 発達段階における児童（正常児と精薄児）の樹木画の変遷 児童精神医学とその近接領域 3:237－246 1962a
(7) 国吉政一他：Baumzeichenversuchの研究（3） 精神薄弱児のBaumzeihnung 精神神経学雑誌 64：817－818 1962 b
(8) Koch, K.：The Tree Test：The tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis Hans Huber, Bern, 1952（林勝造他訳：バウム・テスト－樹木画による人格診断法，日本文化科学社，1970）
(9) 津田浩一：日本のバウムテスト－幼児・児童期を中心に 日本文化科学社 1992
(10) 一谷彊他:バウムテストによる生涯的発達研究［Ⅰ］樹冠と幹の関係指標の発達的傾向と精神的加齢現象の検討 京都教育大学紀要，Ser.A. 69：53－68 1986
(11) 一谷彊他:バウムテストによる生涯的発達研究［Ⅱ］壮年期から老年期にいたるバウムテストの空間利用と加齢の関係 京都教育大学紀要 Ser.A. 71：31－49 1987
(12) 一谷彊他:バウムテストによる生涯的発達研究［Ⅲ］空間領域の使用量と加齢の関係 京都教育大学紀要 Ser.A. 72：1－29 1988
(13) 一谷彊他:バウムテストによる生涯的発達研究［Ⅳ］幹中心部の位置と加齢の関係 京都教育大学紀要 Ser.A. 75：1－13 1989
(14) 一谷彊他：バウムテストによる生涯的発達研究［Ⅴ］精神的・身体的側面の加齢的変化の関係と今後の課題に向けて 京都教育大学教育実践研究年報， 7：207－224，1991
(15) 小林敏子:バウムテストにみる加齢の研究—生理的加齢とアルツハイマー型痴呆にみられる樹木画の変化の検討 精神神経学雑誌 92，1：22－58 1990
(16) 国吉政一他：バウム・テスト（Koch）の研究（Ⅰ）—発達段階における児童（正常児と精薄児）の樹木画の変遷— 児童精神医学とその近接領域 3，4，47－56
(17) 一谷彊:バウムテストでの樹木画の逐年的変化—縦断的資料に基づいて— 日本心理学会第39回大会発表論文集 454 1975
(18) 武田由美子：樹木画の発達段階について—実例からみた錯画期・図式期・写実期の現われ方— 林勝造，一谷彊（編著）バウム・テストの臨床的研究 日本文化科学社 56－68 1973
(19) 中尾舜一他：幼稚園児のイメージ形成の分化—バウムテストによる人間生態学的研究4— 久留米大学論叢 27，1，53－86 1978
(20) 中尾舜一他:幼稚園児のイメージ形成の成長—バウムテストによる人間生態学的研究5— 久留米大学論叢 28，1，21－45 1979
(21) 高見良子他：バウムテスト（樹木画による人格診断法）の基礎的研究（Ⅰ）—教示を変えた場合の発達指標の量的検討（予備調査）— 西宮市立教育研究所紀要 180，33－41 1978
(22) 仙田善孝：バウム・テストの信頼性—幼児を対象として— 心理測定ジャーナル 16，1，14－20 1980
(23) 中田義朗：児童の樹木画の発達指標の再検討 日本心理学会第44回大会発表論文集 533 1980
(24) 山下真理子：バウムテストにおける発達の研究 心理測定ジャーナル 17，11，2－6 1981
(25) 中島ナオミ：幼児のバウムテスト（第2報） 大阪府立公衆衛生研究所報 精神衛生編 21，13－21 1983
(26) 中島ナオミ：幼児のバウムテスト 心理測定ジャーナル 20，5，13－18 1984a
(27) 中島ナオミ：幼児のバウムテスト（第3報） 大阪府立公衆衛生研究所報 精神衛生編 22，21－32 1984b
(28) 津田浩一他：バウムテストの空間領域の利用と年齢的変化 日本心理学会第50回大会発表論文集 601 1986

(29) 中島ナオミ他:幼児のバウムテスト—樹型分類を中心にして— 大阪府立公衆衛生研究所報 精神衛生編 20, 29－41 1982
(30) 山下真理子:バウムテストの発達的研究—樹冠と幹の発達的傾向および描写における空間関係について— 教育心理学研究 30, 4, 23－28 1982
(31) 一谷彊他：S-D法によるバウムテストの検討 関西心理学会第86回大会発表論文集 52 1974
(32) 一谷彊他：S-D法によるバウムテストの因子分析的検討—診断のための探索的試み— 京都教育大学紀要 Ser. A, 47, 1－16 1975b
(33) 一谷彊：S-D法によるバウムテストの因子分析的検討 日本心理学会第40回大会発表論文集 913－914 1976
(34) 一谷彊：バウムテストのS-D法による因子分析的検討 日本教育心理学会第19回大会発表論文集 756－757 1977a
(35) 一谷彊：S-D法によるバウムテストの因子的検討 関西心理学会第89回大会発表論文集 56 1977b
(36) 一谷彊:S-D法によるBaumtestの因子的検討（V） 日本心理学会第42回大会発表論文集 1224－1225 1978
(37) 青木健次:絵画法の再検査信頼性—バウムテストを用いて— 日本心理学会第41回大会発表論文集 457, 1977
(38) 青木健次：描画法の信頼性と妥当性 日本心理学会第42回大会発表論文集 1226 1978
(39) 青木健次:投映描画法の基礎的研究（第1報）—再検査信頼性— 心理学研究 51, 1, 9－17 1980a
(40) 青木健次：態度統制実験による描画指標の検討 日本心理学会第44回大会発表論文集 534 1980b
(41) 青木健次：描画法における全体的印象について 京都大学教育学部紀要 XXVI 129－140 1980c
(42) 青木健次：全体的印象からバウムテストを見る 心理測定ジャーナル 17, 8, 2－7 1981
(43) 一谷彊他:バウムテストの基礎的研究（I）—いわゆる¢2枚実施法£の検討— 京都教育大学紀要 Ser. A, 69, 53－68 1985
(44) 山田麻有美：青年期の樹木画についての一考察－Koch,C.のバウムテストを基にして 女子聖学院短期大学30周年記念論文集 1998a
(45) 山田麻有美：学生理解の手がかりとしての樹木画の研究 日本応用心理学会第回大会発表論文集 1998b
(46) 山田麻有美：青年期の樹木画についての研究 聖学院大学論叢 1999
(47) 山田麻有美：青年期の樹木画に関する研究（2） 聖学院大学論叢 2000